本居宣長記念館蔵「本居宣長手沢本『万葉集』」における注釈と環境

城﨑　陽子

一　はじめに

本居宣長（一七三〇～一八〇一）の本格的な『万葉集』研究は、宝暦六年（一七五六）十月に寛永版本の『万葉集』を購入したことから始まる。奥書によればテキストを入手した宣長は、これに今井似閑の門人である樋口宗武所蔵本によって契沖の所説を書き入れた。宝暦七年（一七五七）五月にはこの作業を終えているが、以後、宣長はこのテキストにさまざまな情報を傍書、頭書、貼紙といった様々な方法で書き入れていく。これが本稿で取り上げる本居宣長記念館蔵「本居宣長手沢本『万葉集』」（以下『手沢本』とする）である。

宣長が寛永版本を入手してから宗武本の借用による書込終了までを「初段階の書込」、それ以降を「次段階の書込」とすると、初段階で書き込まれたことは、『代匠記』（初）の注記の摘記である。『万葉集』を訓もうとする時、宣長がまず何を必要としたかということには様々な可能性が考えられるが、附訓されている寛永版本の訓そのものの問題もさることながら、語義についての疑問が先行したであろうことは想像に難くない。「初段階の書込」はこの語義についての注記が主なものとして考えられよう。

次に、「次段階の書込」であるが、これは、先行する『万葉集僻案抄』『万葉童子問』など、荷田春満の諸説や、『万葉考』といった師・賀茂真淵の説を書き込むことに眼目があったと考えられる。中でも誤字説は真淵の主張

―『万葉集』のテキストは写本される段階で「誤字」が含まれており、「誤字」も一つの解釈として認める―である。『手沢本』にみられる誤字説の書込みは真淵の考えを踏襲してのことになろう。しかし、そうした中から「宣長独自訓」が生みだされていることは、「次段階の書込」が宣長の注釈作業の萌芽を促していたことを示している。

本稿では、宣長の万葉集研究における『手沢本』の位置づけについて、歌の解釈からテキストクリティークを含む本文の再解釈へと進んだ宣長の万葉集研究の見通しを得る。

二　宣長の万葉集研究

宣長の『手沢本』の奥書を確認し、宣長の万葉集研究の概略を記す。

右万葉集二十巻、以景山屈先生家蔵本校正之。至如冠註旁註亦皆拠其本奥書此本也。先生所自校正、蓋以契沖先師代匠記為拠、如其称師云、則今井以閑翁之説也。翁亦契沖之門人也。先生與以閑之門人樋口老人宗武友善、是故、先生以其本校正訓点冠註旁証之、則実契沖伝説之義、不待代匠記而明焉者也。故予深崇信之以余力写之、蔵巾笥為秘珍矣、後之閲者勿忽諸而。

宝暦七年丁丑五月九日卒業。于平安宝坊寓居神風伊勢意須比飯高

蒿庵本居宣長謹

天明六年丙午十月十二日夜会読卒業。

これをみると、宝暦六年（一七五六）十月に寛永版本の『万葉集』を購入したことから宣長の万葉集研究が本格的に始まったことが確認される。奥書によればテキストを入手した宣長は、これに今井似閑の門人である樋口

宗武所蔵本によって契沖の所説を書き入れたことがわかる。そして、宝暦七年（一七五七）五月にはこの作業を終えている。奥書の最後には天明六年（一七八六）十月十二日に「会読」が終わったことが記されているから、宝暦七年以降、宣長はこのテキストを用いて万葉集の講釈をしつつ、ここに様々な情報を書き入れていったことがわかる。この『手沢本』をめぐる一連の動きを宣長の研究活動と関係づけるための略年表を次に載せる。なお、当該の略年表は『本居宣長事典』（東京堂出版、二〇〇一年）の年表を参照し、これに『手沢本』の記事を加えて、作成した。

宣長略年表

享保一五年（一七三〇）　一歳　五月七日、松坂本町に生まれる。

宝暦二年　（一七五二）　二三歳　三月五日、医学修行のため上京。堀景山に入門、寄宿し儒学をまなぶ。

宝暦五年　（一七五五）　二六歳　この頃、契沖の『百人一首改観抄』を読み、古典研究への眼を開かれる。

宝暦六年　（一七五六）　二七歳　三月三日、稚髪し、名を宣長、号を春庵と名乗り、医者となる。

宝暦七年　（一七五七）　二八歳　七月二六日、師・堀景山より譲られた『日本書紀』の校合終わる。**十月、『万葉集』（寛永版本）購入。**

宝暦九年　（一七五九）　三〇歳　九月一九日、堀景山没（七〇歳）。一〇月六日、松坂へ帰宅。医者を開業する。**この頃、賀茂真淵の『冠辞考』を読み、影響を受ける。**

宝暦一一年（一七六一）　三二歳　**この頃、『排蘆小船』執筆か。**

宝暦一三年（一七六三）　三四歳　**五月頃から萬葉集講義はじめ。**

五月二五日、賀茂真淵と対面（松坂の一夜）。賀茂真淵に『万葉集問目』を送り指導を仰ぐ。

明和元年　（一七六四）三五歳　一月一八日、『日本書紀』の講釈を開始。**同月、真淵に入門する。**『古事記』研究に本格的に着手。

明和二年　（一七六五）三六歳　**九月、真淵に呈した『万葉集重載歌及巻の次第』で叱責される。**

明和五年　（一七六八）三九歳　**六月、『万葉集問目』再問。**

明和六年　（一七六九）四〇歳　同月、真淵『古事記』下巻借用五月六日、賀茂真淵、書簡で宣長の祝詞宣命への着眼を誉める。九月『万葉考』刊。**一〇月三〇日、真淵没**（七四歳）。

明和九年　（一七七二）四二歳　三月五日、吉野、飛鳥旅行に友人五人等と出立。一四日帰着（『菅笠日記』）

安永六年　（一七七七）四八歳　**七月二〇日、田中道麿来訪。初めて対面する。**

安永八年　（一七七九）五〇歳　**二月、『万葉古風格』（『詞の玉緒』巻七「古風の部」）、『国歌八論斥非再評の評』既に成る。一一月五日、『万葉集玉の小琴』脱稿。**

安永九年　（一七八〇）五一歳　**一月、田中道麿再び来訪、門人となる。**

天明二年　（一七八二）五三歳　七月一五日頃から瘧。その後も体調優れず、天明四年まで講釈など中断する。**田中道麿問本居宣長答による『万葉集問答』この頃なる。**

＊門人・荒木田尚賢らにより伊勢の林崎文庫復興。

天明四年　（一七八四）五五歳　**一〇月四日、田中道麿没（六一歳）。**

天明五年　（一七八五）五六歳　五月、『詞の玉緒』刊（刊記）。この年、『玉くしげ別巻』稿成るか。同年の入門者に、松坂の服部中庸、名古屋の横井千秋、遠州の栗田土満が

いる。

天明六年　（一七八六）五七歳
一〇月一四日、『古事記伝』巻二版下を名古屋の版木師に送る。

天明七年　（一七八七）五八歳
二月四日、『玉矛百首』刊本出来、届く。四月一四日、真福寺本『古事記』で校合。一二月『秘本玉くしげ』稿成る。一二月、『秘本玉くしげ』、『玉くしげ別巻』を紀州藩に差し出す。

天明八年　（一七八八）五九歳
七月一日、荒木田尚賢没（五〇歳）。

寛政元年　（一七八九）六〇歳
二月三日、宣長六十賀。三月、名古屋行き。春庭、大平同行。目的は講義と、『古事記伝』刊行に尽力している横井、鈴木真実らと対面。版木師・植松有信入門。
八月、「六十一歳自画自賛像」を描く。九月『古事記伝』初帙（巻一～五）刊行。

寛政二年　（一七九〇）六一歳
＊五月、寛政異学の禁

寛政三年　（一七九一）六二歳
春頃、春庭（二九歳）眼病にかかる。
＊一二月五日、加藤千蔭『万葉集』の注釈を志し、宣長に協力を依頼する。→『万葉集略解』へと結実する。

寛政四年　（一七九二）六三歳
一二月三日、紀州侯に仕官（五人扶持）。

寛政五年　（一七九三）六四歳
一月一八日、『玉勝間』起稿。九月中旬、『古今集遠鏡』稿本既に成る。

寛政六年　（一七九四）六五歳
一一月三日、和歌山城で最初の御前講義。**『万葉集玉の小琴別巻』このころまでに成る。**＊殿村安守入門

寛政七年　（一七九五）六六歳　八月二一日、『菅笠日記』刊。
寛政八年　（一七九六）六七歳　七月一〇日、桑名の宿で松平康定に謁す。九月一八日、松平康定侯より依頼された『源氏物語玉の小櫛』の清書に着手。
寛政九年　（一七九七）六八歳　**『万葉集東歌僻説評』このころなる。五月から閏七月にかけ殿村安守による宣長の講義録『万葉集聞書』なる。**
寛政一〇年（一七九八）六九歳　一〇月一三日、『うい山ぶみ』稿成る。**野井安定本居宣長答による『万葉集答問』このころ成る。**
寛政一一年（一七九九）七〇歳　一月二一日、和歌山に出立。二月、稲掛大平（四四歳）を養子とする。三月一六日、七〇賀を三井の別宅畑屋敷で開く。
寛政一二年（一八〇〇）七一歳　七月、『遺言書』執筆九月一七日、山室山に行き、墓地の場所を定める。
享和元年　（一八〇一）七二歳　九月一八日発病。二九日早朝没。この時の門人数四八八名。
＊門人横井千秋、小篠敏没。宣長没した直後に伴信友の入門願いが届き、没後の門人となる。

宝暦六年（一七五六）に「寛永版本」を入手したころ、宣長は『日本書紀』の校合を行っている。契沖説を『手択本』に書き写し終えた宝暦七年（一七五七）は、松阪に帰ってきた時期でもある。宝暦一一年（一七六一）五月に『万葉集』の講義を開講した宣長は、宝暦一三年（一七六三）五月に念願であった賀茂真淵との対面を果たしている。以後、宣長は真淵と『万葉集』についての問答状を通わせ、これが『万葉集問目』（以下『問目』とする）となって結実する。『手沢本』には、『問目』の成果や、安永八年（一七七九）に脱稿した『万葉集玉の

小琴』（以下『玉の小琴』とする）に至ると考えられる宣長説の多くが記され、その思考の過程をたどることができるのである。また、『手沢本』は宣長の「学びのパターン」を知る上でも看過できない[1]。

従来、『手沢本』はその「書き込み」過程が複雑な点から研究対象として取り上げられる機会が少なかった。例えば「師説」とある書込については、木村正辞が『万葉集書目提要』の中で「書中に師説とあるは。本居の跋文に拠れば以閑の説の如し。然ども其説を見るに多くは真淵の説なり。」と指摘して以降、いずれの説が記されているかを一つ一つ確認する必要もあるのだ。しかし、そうした様々な制約を超えても、宣長の万葉集研究の全貌に迫る資料性を『手沢本』がもちえていることは否定できない。

三　『手沢本』の書込・頭書・貼紙

具体的に『手沢本』の書込、頭書、貼紙等について確認してみたい。ちなみに、『手沢本』を翻刻するに当たっては、以下の凡例によった。

凡例　・書込の箇所は寛永版本の丁の表「オ」、裏「ウ」で示し、その下に行を数字で示した。
・片仮名傍訓が左右に付けられている場合（右）（左）として区別した。
・注記は「　」で示した。
・見消は【　】で示し、訂正はその下に（　）で示した。
・朱書は『　』で示した。
・合字は全てひらき、異体字は通用のものにあらためた。
・読みやすさを考え、適宜句読点を施した。

（一）巻一・一番歌の書込・頭書・貼紙

雑歌

初瀬朝倉宮ノ御宇天皇代　太初瀬稚武天皇

天皇御製歌

籠毛與美籠母乳布久思毛與美夫君志持此岳爾菜採須兒家吉閑名告汝根虚見津山跡乃國者押奈戸手吾許曽居師告名倍手吾已曽座我許者背歯告目家乎毛名雄母

6ウ　書込①栄花物語月ノ宴巻云。ムカシ高野ノ女帝ノミヨ天平勝宝五年ニハ左大臣橘卿諸兄、諸卿大夫等アツマリテ万葉集ヲエラハセタマヒ云々。

書込②万葉集橘諸兄撰聖武帝勅家持同撰云々。此説非也。家持自分ノ撰也。

貼紙①尾張名児屋大須真福寺所蔵万葉集巻一ノ残簡一冊アリ。其本ハ端書ヲ上ケテ書テ歌ヲ下ケテ書リ。訓ハ印本ト同シ書サマ也。

貼紙②二条良基公ノサヨノ子サメニ云ク、顕昭ト云シ人日本紀ノ神代ヨリノ歌ノ心ヲカキアラハシ、仙覚ト云シモノ万葉ノムネヲエテ三百餘首順ナトタニモヨミトカサル点ヲクハヘ侍リ。

貼紙③師説［加茂縣主］○須児ハシヅ子也○吉閑　吉一本告也。閑ハ閇ノ誤ナルヘシ。告閇也。○許曽也。○背止者也。止者ヲ歯ノ一字ニ誤レリ。○ワレコソヲラシ。ノリナベテ。ワレコソ。セトハノラメト訓ヘシ。

○宣長按吾許曽居。師吉名倍手。吾已曽座。我許曽瀬止母告目ナルヘキカ。菜採須児ナルヘシ。

貼紙④オシナベテ　宣云オシハ統ル意也。日廿五ノ卅七ヲ押使ト訓リ。又押領使ナトノ押モ此意也。

貼紙⑤菜ツマス児第十七ノ廿七丁ヲトメラガワカナ都麻須等

山田苅為子(ヤマダカラスコハ)七ノ廿七ヲ山田守酢児(モラスコ)十ノ四十ウ　伊渡為児者(イワタラスコハ)九ノ十九ウ

7オ1　①雑歌―ザウノウタ

2　①太初瀬稚武天皇―雄略

3　①御製歌―（右）ミウタ／オホミウタ（左）ミツクリノウタ

4　①籠―【コ】『カタマ』【コ】『ガタマ』

②布久思―「和名鑑。加奈布久之。」

「堀串ノ中略也。金ニテヘラノヤウニ作リタルモノ也。土堀子(ホグセ)トモ云。」

5　①採―ツマ　②須児―「男女ニ通シテ云カ。」

③吉閑―ノラヘ　④閑―『カン』

⑤告―【ツケ】『ノラ』

頭書①此歌ノ心ハ須児(スゴ)ハナゼニナノラヌゾ早クナノリテ我ニキカセヨ此国ハトナリ、須児ナルユヘニ天子ノ前ニテモノイヒカネタルヘジ

頭書②五ノ七丁奈何名能良佐祢(ナガナノラサネ)

6　①居師告―ヲレシキ

7　①座―マセ　②我許者―ワヲコソ

③背歯告目―セトハノラメ。「スゴヲ云。」

頭書①者ハ曽ノ誤ニテ我許曽(ワレニコソ)カ。又背ノ字モ心得ガタシ。

貼紙①夫木卅三コケコロモ。チフクシモヨミ。フクシモテ。コノヲカニナツムスコ。イヘキケトアリ。ムカシハ籠毛與美籠母(コケコロモ)云々ト訓シニヤ。

②続紀養老六年ノ文ニ藤原宮御宇太上天皇トアリ。九ノ九丁。

巻一・一番歌のみの事例ではあるが、これらを小括すると次のようになる。

①『手沢本』の貼紙は「覚書」「師説（真淵説）」「事例」が示される。
②書込みの朱・墨の前後関係はつけられない。（7オ3）
③朱筆の見消は真淵説の可能性あり。（7オ4①）
④朱筆の見消は『代匠記』（初）の可能性あり。（7オ5⑤）
⑤『代匠記』（初）を摘記している。（7オ4②、7オ5②、7オ5頭書）
⑥真淵説（7オ5③、7オ7③）
⑦春満説（7オ5④）
⑧誤字説に基づく独自訓（7オ6①）

「小括②」や「小括③」といった細かな訓の異同については、今少し検討を要するが、例えば「小括④」については、『代匠記』（初）に「告の字のるともよめは、なのらさねともよむへし」とあることが証左となろう。

「小括⑤」については、『代匠記』初稿本と照らし合わせて、その跡が確認される（傍線筆者）。例えば、「7オ4②」は『代匠記』（初）に「かねにて、へらのやうにこしらへて、菜摘女のもつ物にて、これにてそのねをさし切てとるなり。常にはふくせといへり。」の傍線部分を摘記したと考えられる。「7オ5②」については、『代匠記』（初）に「男女に通していふへし。今は女なり。しとせと五音通すれは、ふくせともいへるなり。」とある傍線部分を摘記したと考えられる。さらに、「7オ5頭書①」については『代匠記』（初）に「惣しての心は、御狩なとに出させたまひて、岡へを御覧したまふおりふし、いやしき女の、かたちなとはきたなからぬが、うるはしきかたみぬきいれ、いたひけしたるふくしをもちて、かのをかたになをつみてゐたるに、たれとなき御ありさ

まにて、とひよらせたまひて、家はいつくのほとにかすむ、名は何とかいふと、たつねさせたまへと、かつは凡人ならむ御いきほひにおそれたてまつり、またはいやしき身をはちらひたてまつりて、ともかうもきこえあけぬを、（以下略）」とある傍線部分を摘記したと考えられる。

また、「小括⑥」については、次に掲げる『万葉考』との対照によって、例えば「7オ5③」の訓「セトシノラメ」については、真淵説であることが確かめられる。

六言、背は夫（セ）也、歯は登志（トシ）の言に借て、志（シ）は辞也、こは荷田大人（ウシ）の初めの考なれど、暫よりぬ。又背の下に登の字落たるか、然らは夫登者（セトハ）のらめと訓て事もなし、正本を待のみ。

「小括⑦」の「7オ5④」の訓は荷田春満説である。また、「小括⑧」「7オ6①」は真淵の誤字説にのっとった宣長の独自訓が示されている例として注目される。これについては、『代匠記』（初）に「をらし」の訓がみえ、これについて宣長は『玉の小琴』（安永八年〈一七七九〉に脱稿）で次のように記し、誤字説と「ヲレシキ」の訓を主張するのである。

本（注・寛永版本）に、居師と師ノ字を上の句へつけて、をらしと訓るは誤也、こゝはをらしといひては、語ととのはす、又吉ノ字を告に誤りて、つげなべて、のりなべてなとよむも、いかゝ。のりなべといふこと心得ず、こは必吉ノ字也。

ちなみに、加藤千蔭の『万葉集略解』には宣長説として次のように紹介されていることから、寛政三年（一七九一）頃から始まった『略解』への協力時にはこれを「われこそませ」と訓ませていたことが確認される。

宣長説に、居師と師の字を上句へつけて訓るハ誤也、師の下の告の字ハ吉の字の誤なるべし、さて師を下へ付てわれこそをれ、われこそませとよむへし。

以下、いくつかの事例を取り上げ、本稿で問題とする「宣長の注釈と環境」について言及する。

（二）巻一・二番歌の事例

高市岡本宮御宇天皇代　息長足日廣額天皇（タケチ　ヲカモト　フキナカタラシヒヒロヌカノ）

　天皇登香具山望國之時御製歌（ヤマトニハムラヤマアレトトリヨロフアマノカクヤマノホリタチクニミヲスレハクニハラハケフリタチタツウナハラハカマメタチタツキモシキクニソアキツシマヤマトノクニハ）

山常庭村山有等取與呂布天乃香具山騰立國見乎爲者國原波煙立籠波海原加萬目立多都怜忄可國曽蜻嶋八間跡能國者

7ウ1書込①天皇―舒明

　2　②望國―ホゼリマス

　3　③天―【アマノ】（アメノ）

　④具―具ノ字濁ルヘシ。スヘテ此集濁ル字ニハ濁字ヲ用タリ。コノカグ山ニハ必ズ濁字ヲカケリ。

　4　⑤籠―【タツ】（朱）（コメ）。「宣」の小字。

　5　⑥怜忄可―【オモシロキ】（ウマシ）。「師或」の小字。

　一つ一つに事例を掲げることはしないが、②は宣長の独自訓である可能性が高い。③、④、⑥は真淵説である。そして、⑤は「宣」の小字が朱筆の脇に添えられている例で、これは、宣長が記した「自説の印」であると考える。

（三）巻一・三・四番歌の事例

　天皇遊獵内野之時中皇命使間人連老獻歌（カリシタマフ）

（ヤスミシシワガオホキミノアシタニハトリテタマヒユフヘニハイヨセタテシミトラシノアツサユミノナガハスノオトスナリアサガリニイマタスラユフガリニイマタスラシミトラシノアツサユミノナガハスノオトスナリ）

八隅隅知之我大王乃朝廷取撫賜夕庭伊縁立之御執乃梓弓之奈加弭音爲奈利朝獵爾今立須良思暮獵爾今他田渚良之御執梓能弓之奈加弭乃音爲奈里

　反歌（タマキハルウチノオホノニウマナメテアサフマスラムソクサフケノ）

玉刻春春内乃大野爾馬數而朝布麻須等六其草深野

8オ　貼紙①中弭　ナカハズ　谷川氏云　往古ノ弓ハ弦ノ中ホトニ竹ニテ筈ヲナサリコレヲ中筈ト云。南都正倉

院ノ所蔵ニモ此サマ見エタリ。

②中弭　或云　奈加弭ハ長弭也。末弭（ウラハズ）ヲイフ末弭（ウラハズ）ハ長ク造ルモノ也。

※『代匠記』（初）

1書込①奈―ナ長リ　宣。※『代匠記』（初）

②奈加―【ナガ】（ナリ　宣）。

※独自訓。『玉の小琴』に「加」は「利」の誤字とし、「ナリハス」とある。

③奈加弭―石原正聴云。弭ハ弦ノ誤ニテナリヅラヨシ

5　④【馬】（駒）、官本。

当該例で注目したいのは、「貼紙①」が谷川士清説であることや、「書込③」に石原正聴の誤字説を紹介していることだ。

谷川士清は宝永六年（一七〇九）二月伊勢国安濃郡新町八丁刑部（現在の三重県津市）に生まれた国学者である。谷川家は代々医学を修める家柄で、五十七歳ごろから本居宣長と親交を結んだ。時期としては、宣長は、真淵と邂逅し、古事記研究に着手したころである。谷川士清は『日本書紀』を重んじ、諸説を集め和漢の出典を精査した『日本書紀通証』を四十三歳で脱稿、五十四歳の時に刊行した。和漢雅俗語を五十音順に解説した『和訓栞』は国語辞書の、『倭語通音』は活用研究の先駆である。草稿を氏神世子明神の「反古冢」に埋め、翌安永五年十月に六十八歳で没した。この谷川説を貼紙としていることは、谷川氏との交流がそこに認められるということである[2]。

また、石原正聴は宣長門人の石原正明（名は将聴）のことおぼしい。尾張国海東郡の生まれで、寛政四年（一七九二）に名古屋に出講した宣長に入門した。後に江戸に出て、塙保己一に師事し、『群書類従』の編纂や和

学講談所の運営にも加わったとされるから、この説を宣長が聞いたのは、寛政四年以降の事である。石原正明は文政四年（一八二一）に五十八歳（一説に六十二歳とも）で亡くなったとされるから、寛政四年には既に六十四歳であった宣長が、三十歳そこそこの人物の説を記していることになる[3]。

さらに、書込み④で「官本」として、非仙覚本系の本文が記されていることは、何をもって「官本」としていたかということとあわせて注目される。

（四）巻一・八番歌の事例

額田王歌
熯田津爾舩乗世武登月待者潮毛可奈比沼今者許藝乞菜
（ニギタヅニフナノリセムトツキマテハシホモカナヒヌイマハコキコナ）

右撿山上憶良大夫類聚歌林曰飛鳥ノ岡本宮御宇天皇元年己丑九年丁酉十二月己巳朔壬午天皇大后幸于伊豫湯ノ宮ニ後ノ岡本宮駅宇（キヨウ）天皇七年辛酉春正月丁酉朔壬寅御舩而征始就于海路庚戌御船泊（トマル）于伊豫ノ熯田津（ニギタツノ）石湯行宮（カリミヤニ）天皇御覧昔日猶存之物ヲ當時忽起（ミソナハスムカシヨリ）感愛之情所以因テ製ヲ歌詠爲之哀傷（アアスノ）ヲ也即此歌者天皇御製焉但額田王歌者別有四首

10オ　書込　天皇元年丑―【丑】（己）。大須本。

当該例の注目すべきところは、書込みの対校に「大須本」なるテキストが使われている事であろう。これは、通称「大須観音」と呼ばれる真言宗智山派北野山真福寺（名古屋市中区大須）を示している。当寺には現在『万葉集』のテキストは伝来していないが、『手沢本』「6ウ貼紙①」の記事を見る限り、巻一のみの零本として一本が伝来していたことがわかる。また、当該のテキストを宣長が披見できたことは、尾張藩士横井千秋らの助力があったためと考えられる。

（五）巻一・九番歌の事例

幸于紀温泉之時額田王作歌

莫囂圓隣之大相七兄爪謁気吾瀬子之射立為兼五可新何本（ユフツキノアフキテトヒシワカセコカイタタセルカネイツカアハナム）

10ウ　貼紙①　田中道万呂云、昼ニクラフレハ夜ハシヅカナル意ニテ莫囂也（ユフ）。圓隣ハ即夕月ノ形ニテ満月ノトナリノ意也。又莫囂圓隣之大相古曾湯気（右）「ナゴマリニシホヒコソユケ」

書込②　【壬】（丙）、大須本。

【而】（西）、日本紀。大ス本。

11オ　書込③　大須本此歌仮字ツケナシ。此歌秘点アリ、外ニ伝授ス。万葉中一首ノ難歌也。

「大須本」の書き込みは、巻一・九番歌にもみえる。特に、当該例は『万葉集』の難訓歌として知られる一首であることからも、「秘点」「伝授」の言葉があり、宣長が当該歌に関しては「伝授」を行っていた可能性が指摘できる。中世歌学で専らな「秘伝」「伝授」を宣長がどのような形で行っていたのかわからないが、「特別講義」くらいの意味であろうか、「宣長の学びのパターン」がうかがえる。

また、当該例には「田中道万呂（麿）」の名が見えることも注目される。田中道麿は美濃国多芸郡榛木村（現在の岐阜県養老郡養老町）の生まれで、大阪や名古屋に在した。初め大菅中養父に師事したが、後に宣長に入門し、万葉研究に才を現したとされる。天明四年（一七八四）に六十一歳で亡くなっており、当時五十五歳だった宣長は、田中道麿の名古屋の門人を引き受ける形となった。

四　おわりに

本居宣長手沢本『万葉集』の書込には、長年にわたる「講読」によって施された宣長の『万葉集』に対する「訓み」が示されている。はじめに「初段階の書込」とした『代匠記』（初）の書込から始まり、「師説」として

賀茂真淵やその師・荷田春満の説が書き込まれていった。その間、目に触れるテキストとの校合も行われたことがわかる。特に、巻一には「大須本」と呼ばれる零本の存在が認められ、さらには「官本」と呼ばれる、非仙覚系の一本を目安にしていたことなどがわかった。

また、書込の中には、谷川士清、石原正聴、田中道麿など、宣長と交流をもった人物からの諸説が示されており、宣長の「訓み」が様々な機会をとらえて生み出されていったことを物語っている。そして、こうした「機会」をとらえて醸成された「訓み」―「独自訓」も含め―が宣長の万葉集研究として『手沢本』に蓄積され、その情報が「宣長の万葉集研究」を醸成していったのである。本居宣長という一人の国学者が行った「万葉集研究」が様々な環境の中で成立していく過程を『手沢本』は物語るといえ、さらなる研究を重ねたいと考える。

注

1　「学びのパターン」とは、「人的交流も含めた様々な学問形態」を指す。当該の用語を含めた宣長の和歌研究に対する拙稿は、「『写す』ことと『読む』こと―本居宣長記念館蔵『万葉集玉の小琴』と國學院大學蔵『万葉集玉の小琴』との比較から―」（『新國學』第二号、平成二十二年十月）と「本居宣長の歌学びと注釈」（『新國學』第三号、平成二十三年十月）がある。

2　岡中正行、鈴木淳、中村一基『本居宣長と鈴屋社中 ―『授業門人姓名録』の総合的研究―』錦正社、一九八四年。

3　注2前掲書参照。

付記

本稿を著すにあたっては、「本居宣長手沢本『万葉集』」の閲覧および翻刻の掲載等について、本居宣長記念館より格別のご高配を賜りました。記して感謝申し上げます。

Annotations and Backgrounds of "My Favorite Book: Motoori Norinaga's Personal Copy of the Man'yoshu, Motoori Norinaga Memorial Hall Collection.

SHIROSAKI Yoko

Norinaga Motoori (1730-1801) was a Japanese classical scholar in the late Edo period. His study of "The Anthology of Myriad Leaves", or "Manyoshu (万葉集)", started at a full scale after he bought the Kanei-era (1624-1644) version of The Anthology in October 1756. According to the postscript of "Shutakubon Manyoshu (My Favorite Book : Motoori Norinaga's Personal Copy of the Man'yoshu 手沢本「万葉集」)" (hereafter "My Favorite Book"), Norinaga added theories and opinions of Keichu (契沖) he cited from the collection of Munetake Higuchi (樋口宗武), a pupil of Jikan Imai (今井似閑), into his copy. Upon completing this work by May 1757, Norinaga further added various information with various methods, namely bosho (side annotations ; 傍書), tosho, harigami (annex to premise ; 頭書、貼紙), etc. These works constitute Norinaga's My Favorite Book, which this study examines.

Here, this study calls the phase where Norinaga purchased a copy of the Kanei version and completed citation from Munetake's collection as "Initial Annotations", and the following phase as "Secondary Annotations". In the Initial Annotations, Norinaga summarized Keichu's notes in the original edition of "Daishoki (代匠記)". While there can be many possibilities as to what Norinaga initially needed in his attempt to delve into The Anthology, the primary purpose of the Initial Annotations most likely to have been to add comments on the meanings.

As for the Secondary Annotation, he probably aimed mainly to include opinions by Azumamaro Kada (荷田春満) introduced in works like "Manyoushu Hekiansho (Summary of My Personal Opinions on The Anthology ; 万葉集僻案抄)" and "Manyoshu Doujimon (Questions and Answers on The Anthology ; 万葉童子問)", as well as theories by Mabuchi Kamo (賀茂真淵), his teacher,

introduced in “Manyoko（Thoughts on The Anthology；万葉考）”. Among various theories, the Theory of Typographical Errors specifically is attributed to Mabuchi. Notes on the Theory of Typographical Errors as included in My Favorite Book probably follows his teacher’s theory. Even so, the inclusion of “Norinaga Dokujikun（Norinaga’s original notes；宣長独自訓）” suggests that the work prompted Norinaga’s engagement in annotation works.

This paper regards My Favorite Book as the record of his footsteps on The Anthology study and follows the development from interpretations of the songs to the re-interpretation, including text critiques, of the same.